



新宿山吹だよりは、保護者の皆さんにも読んでもらって下さい。

「教養をつける」 — よい音楽を聴き、よい小説を読み、よい映画を観る —

校長 永浜 裕之

春季休業日も終わり、いよいよ新学期を迎えました。年度の始まりに際し、学校での勉強に加えて、「教養をつけてほしい」というお話をします。

我が身を振り返ると、高校時代や大学時代、最も恥ずべきことは、いわゆる「薄い奴（やつ）」と友人から思われることでした。「薄い」とは「教養がない」という意味です。

教養がないとは、テストの点数が低いということではありません。教養とは、「**哲学、思想、文学、歴史といった学問や読書から先人の知恵を学び、内面に照らして自らを高めていく姿勢**」を指します。日頃、友達と議論していて、「薄い奴」と思われるのは恥でした。それゆえ、懸命に勉強したり、本を読んだりしたものです。私が通っていた高校では、「事前に断ってくれば、授業に出ずに校庭で本を読んでもいいぞ。ただし、哲学書に限る。」などと話す先生もいました。

このように、教養を重んじる姿勢を「**教養主義**」といますが、教養主義は、「青春」と相性がいいと思います。懸命に勉強し、本を読みながら、人生に思い、悩み、そして、理想とする人格に近づいていく。まさに、**青春だと思いませんか。**

当時、背伸びをして読んだ本を1冊紹介します。阿部次郎という人が書いた「**三太郎の日記**」です。阿部次郎は、哲学者、美学者であり、旧制一高から東大へと進学したいいわゆるエリートです。「**教養主義のバイブル**」と呼ばれたこの本は、若き日の苦悩や思索を日記風に綴ったもので、**ショーペンハウエル、ニーチェといった哲学者、ヘッセ、リルケなどの文学、ゲーテの「ファウスト」**なども登場します。

この本が書かれた当時、明治以降の近代化により、西洋の学術・文化が取り入れられ、特に日本が、哲学、文学、医学を学んだドイツの影響を強く受けていたと思われます。インターネット上で著作権が消滅した作品を公開している「**青空文庫**」(<http://www.aozora.gr.jp/>)でも公開されています（旧字旧仮名で書かれていますので読むのは大変かもしれませんが。興味がある人はチャレンジを）。

さて、私の高校時代、約50名いたクラスメートのうち、1～2名は成績不振で原級留置となりました。でも、「薄いやつ」でなければ劣等視されることはなく、「**読書に夢中になりすぎたな**」と同情される程度でした。

最近では、大学の一般化、大衆化したがつて教養主義は語られることすら、ほとんどありません。一部の大学を除き、現在の大学はレジャーランド化しているとさえ言われます。そんな時代だからこそ、皆さんには「**教養をつけてほしい**」と思います。

「**哲学書、歴史書**」などというと、敬遠されてしまうかもしれません。そこで、「**よい音楽を聴き、よい小説を読み、よい映画を観て**」ほしいと思います。学校で学ぶ様々な内容に加え、視野を広げることとはとても大切だと思います。

定時制課程の予定

4月5日(日) 春季休業日終
6日(月) 始業式、LHR等
7日(火) 入学式

5月7日(木) ※ 学校再開予定

様々な連絡は、本校Web(ホーム)ページで行います。

通信制課程の予定

4月2日(木)～3日(金) 願書受付①、②
5日(日) 春季休業日終
6日(月) 入学者選抜
10日(金) 合格発表

様々な連絡は、本校Web(ホーム)ページで行います。

はじめまして

校長 永浜 裕之

4月1日付で、光丘高校より転任しました。学校だよりで自分の教員人生を振り返るのはいかなものか？と考えましたが、山吹ならよいかも！と考え、以下に記します。生徒の皆さんへの自己紹介です。

私は、昭和59年4月、都の教員として**都立台東商業高校（現、浅草高校）**に採用されました。7年が過ぎ、そろそろ必異動という頃に、新宿山吹高校開設準備室に勤務していた先輩教員から声がかかり、開設準備室の校長先生と面接し（合格したのか？）、**新宿山吹高校開校と同時に着任**しました。今から30年前です。深川商業高校での合格発表の時、校庭で土下座をして、「ありがとうございます。頑張ります」と声をあげている生徒がいました。私が担任となるI君です。彼はプロボクサーで、ボクシングをしていた私とは折に触れ、話をしたものです。開校1年目、2年目と多数の教員が配置されましたが、熱意溢れる有能な同僚に囲まれ、「定年までこの学校で働きたい」と心から思いました。J2とF1の担任、教務部と生涯学習部で働きました。

9年間の山吹生活を終え、平成12年4月、**東京都教職員研修センター**に異動しました。センターでは、①情報教育（情報活用能力の育成）、②教科指導におけるICTの活用という、2面で研究にあたりとともに、教員研修を主催したり、各学校に指導・助言を行ったりしました。当時の話題は、文部科学省が毎年度末に行う「教育の情報化実態委調査」における、東京都の校内LANの整備率の低さと、児童・生徒用コンピュータ台数の低さです。「e-JAPAN戦略」の目標年度を迎えても改善されず、「本庁の担当者は大変だろうな」と想像していたら、情報教育担当指導主事として**本庁（教育庁指導部）**に異動内示を受け、当事者になってしまいました。

異動した平成17年度は、ルーチンの事業をこなしつつ、8月の予算要求に向けた庁内調整に奔走します。「ICTを活用することによる学力向上」を予算獲得の理由に掲げ、様々な資料を作成し、ダメ出しをされ、研究指定校の教員と協力して資料を作成し、・・・を繰り返し、8月下旬、予算要求が教育庁内で承認されました。財務局に予算要求書が渡った時の喜びは忘れられません。秋になり、まさかの「ゼロ査定」の連絡を受けます。その時の力が抜けるような感覚もよく覚えています。平成18年度も教育庁内の承認は得られたものの、財務局査定はゼロ回答でした。東京都は地方交付税不交付団体であり、文部科学省からの予算措置も受けていませんでした。

ところが、どんでん返しが待っていました。平成19年の第一定例都議会の代表質問で、ある議員が、「東京都の校内LAN整備率は47位。・・・改善するべきだと思いが見解を伺う」という趣旨の質問をしました。教育長が「その通りである。改善のために予算要求をしている。」と回答し、聞いていた石原都知事が、「あの質問内容は事実か？」と聞いてきました。庁内は騒ぎとなり、荒川区の小学校で指導・助言を終え、懇親会に向かう途中の私は都庁に呼び戻されました。知事室で、「東京都のICT環境整備にいくらかかる？」と知事。教育長が片手を広げ、「50億円です」と答えました。知事は、「何だ、それっぽっちゃ。とにかく、東京を日本一にしろ。」と話されました。

知事の命令で、予算が付くことは確定となり、平成19年度は、制度設計に明け暮れました。都立学校対象なので、小中学校は対象ではなく、都立高校と特別支援学校のICT環境を設計しました。校内LANを全校に敷設し、電子黒板機能を備えたスクリーンを全教室に備え、移動タイプのタブレットPCと 프로젝터를配備する計画を立てました。開発したデジタル教材を教員間で共有するためのデータセンターを開設したり、校務用PCとして、TAIMSというシステムを組んだPCを教員一人一台用意したりと、大がかりな設計を行いました。当初予算は約80億円で、その後毎年30億円必要となる事業となりました。平成20年度から2年間で全校整備を終え、その後、校内Wi-Fiの整備や天吊り式のプロジェクトの設置など、リニューアルが行われています。

長々と説明しましたが、私が教育庁に在籍していた偶然のタイミングで都立学校のICT化が実現し、そのことが、その後の教員生活に影響を及ぼすことになるのです。

ここからは、概要です。平成20年度から22年度は**都立桐ヶ丘高校（東日本大震災経験）**、23年度は**都立飛鳥高校**、24年度から25年度は**渋谷区立広尾中学校（平昌オリンピック銅メダリスト原 大智君と出会う）**、26年度は**教育庁指導部（防災ブック「東京防災」の編集）**、27年度から28年度は**都立第四商業高校**、29年度から令和元年度は**都立光丘高校**、令和2年度は**新宿山吹高校**です。**20年ぶりに戻ってきました。**